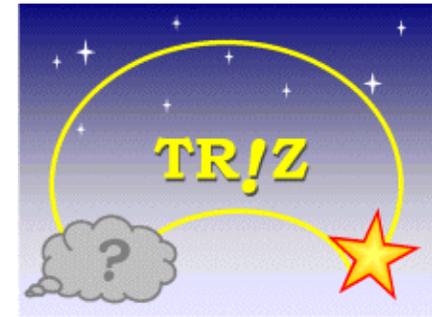


第13回 日本TRIZシンポジウム 2017
2017年9月21日(木)～22日(金)
中野サンプラザ(東京都中野区)



人類文化の主要矛盾「自由vs愛」を考察する

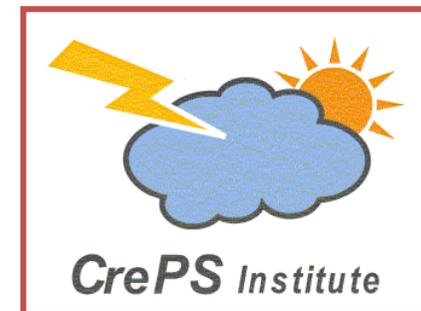
(2) 個人における

「自由vs愛」の矛盾・葛藤と「倫理」

2017年 9月21日

中川 徹

(大阪学院大学 & クレプス研究所)



はじめに : (趣旨とアウトライン)

本研究は、輻輳した社会的な問題に、TRIZ／CrePSを適用し、人類文化の根底にある矛盾を解明しようとする (第2報)

(1) 前報で、TRIZ/CrePSを、「日本社会の貧困」の問題に適用した。

藤田孝典著『下流老人』(2015)を取り上げ、論旨を「見える化」した。貧困問題の根底には、「貧しくなったのは自己責任だ」という考えが、「助け合いの精神」、「社会保障による救済」と対立している。その根底は、「自由」の思想と、「愛」の思想との対立であると認識した。

(2) 基本仮説: 「自由vs愛」が「人類文化の主要矛盾」であり、未解決である。

- ・ 「自由」(とその伸張)が人類文化の第1原理
- ・ 「愛」(とその普遍化)が人類文化の第2原理
- ・ 「自由vs愛」が人類文化の主要矛盾(「自由」同士、「愛」同士の矛盾も)
- ・ 「自由」と「愛」の両方を動機づけ、調整できるものは、「倫理」
- ・ 未解決の理由: 「自由・愛・倫理」の現状と理想が解明できていない(個人のレベルでも、社会システムのレベルでも)。
「倫理」に反しても「勝てば官軍」。勝者が社会ルールを作る。

- (3) 本報では、前報の基本仮説をさらに考察した。
個人(および個人間)のレベルを中心に、
「自由・愛・倫理」の関係を(矛盾とその克服の観点から)考察した。

個人の成長段階との関連を考察した。

(乳児・幼児期、学童・少年期、青年期、壮年期、老年期)
関連する諸事象のキーワードの関連を、札寄せ法で考察して、
自由・愛・倫理の内部構造と相互関連を図式化した

- (4) 基本仮説を以下の点で推敲・拡張した。

- ・ 「倫理」(とその深化)が人類文化の第0原理である。
欲・欲望を「悪の心」から「善の心」に向けさせる指針。
「すべての人の本質的平等」、「基本的人権」が歴史的に明確に
- ・ 第1原理「自由」は、革新・創造をもたらすと共に、勝者の支配・保守を生む
- ・ 第2原理「愛」は、奉仕・協調を旨とするが、外部から守るために対立を生む
- ・ 「自由」同士、「愛」同士、「自由」と「愛」間に、さまざまな矛盾の形態がある
- ・ 「倫理」が不十分のとき(「悪の心」が潜むとき)、
「自由」も「愛」も本質的に損なわれる。
- ・ すべての行動や社会ルールに「倫理」を浸透させることが、
人類文化の主要矛盾「自由vs愛」を克服する方向である。

(前報で) 私が考えたこと:

「貧困」に関する議論の根底には、人々の心理・理解に大きな未解決のことがある。

競争社会における「勝ち負け」と「助け合い」に関わる考え方が、未解決である。

一方で、競争は、勝ち負けの世界、自己責任だという世界。
もう一方で、助け合い、協力、生活保障、福祉を考える世界。

人々の社会的な理解において、この二つの両立が、共通の理解になっていない。

社会的思想、社会倫理として十分に解明されていないからだ。

突き詰めると、「自由」と「愛」という重要な標語に到達する。

この「自由」の考え方と、「愛」の考え方とが対立していて、
その調整のしかたが、共通認識になっていない。(日本でも世界でも)

これは、個別事例の対立ではなく、もっともっと深い問題である。

「自由」と「愛」の対立は、実は「人類文化の主要矛盾」であり、
その矛盾を解決することが、「人類文化の主要課題」である。

基本仮説：「自由」vs.「愛」が人類文化を貫く主要矛盾

前報： 中川 徹 TRIZシンポ2016

(1) 人類の文化は、「自由」を第1原理とし、その伸長を主要目標とする。

各人が、自分で判断し、行動し、「生きる」ことである。

「自由」は、(自然的、社会的な)「競争」に「勝つ」ことを目指す。

一人の「自由」と他者の「自由」とは、必然的に衝突(矛盾)する。

(2) 人類の文化は、「愛」を第2原理とし、その普遍化を主要目標とする。

各人が、その子を愛し、家族を愛し、隣人を愛して、「助け、守る」ことである。

「愛」は、「自由」を自制して、「自由」同士の衝突を無くすことを目指す。

「愛」は、「身内」を助け・守るために、「外」からの攻撃に対抗する。

それは、一つ上の社会レベルでの「自由」と「競争」を出現させる。

(3) 「自由」vs.「愛」 が、「人類文化を貫く主要矛盾」である。

「自由」同士にも、「愛」同士にも、「自由」と「愛」の間にも、さまざまな矛盾がある

(4) この「自由」と「愛」との両方を包含して動機づけ、その間の調整を行う指針として人類文化が獲得してきたのは、「倫理」である。

平たく言えば、「人の道」、「良心」。

「倫理」の根幹部はすでにDNAに埋め込まれていると考えられるが、当たり前すぎて、明示することが難しい面がある。

*** 先天性(遺伝、人類共通) と後天性(教育)の区分は判断が難しい。
この第2報で、新しい認識を得た。(後述) ****

「基本的人権」の概念は、この「倫理」の一部が明確化されたもの。

(5) 人類は、さまざまな社会システムを形成し、高度な文化を生んだ。
しかし、「自由」vs.「愛」の「主要矛盾」は、まだ解決されていない

経済、政治、・・・、言語、宗教、社会思想、科学技術、芸術、・・・

「主要矛盾」は至るところに在り、生まれ、大規模化し、深刻化している。



本報での考察:

個人(および個人間)のレベルを中心にして、
「自由・愛・倫理」の関係を(矛盾とその克服の観点から)考察した。

[考察準備1] 個人の成長段階に応じて、「自由・愛・倫理」の関係を考える。

時期区分		全般	「自由・愛・倫理」の 状況・特徴	「自由・愛・倫理」の 留意点
(1) 乳幼児期	(1a) 乳児期	赤子の状態から、歩き、言葉を発するまでに成長する	先天的な能力をベースに、心(「倫理」、行動・判断(「自由」、コミュニケーション(「愛」)の基礎を備えてゆく	先天的なものは何か？ 後天的なものは、文化に依存し、歴史的に発展する。
	(1b) 幼児期	好奇心から、いろいろなことをやろうとし、教えられていく。	いろいろやろうとして、やってよいこと、いけないこと、親しくなること、善悪の基本などを教えられる。(しつけ)	教えるべきことは多くの矛盾を含む(多面的)。 「自由・愛・倫理」を適切に、段階を追って教えていくやり方を明確にするべきである。

時期区分		全般	「自由・愛・倫理」の 状況・特徴	「自由・愛・倫理」の 留意点 
(2) 学童・少年期	(2a) 学童期	小学校に通うようになり、初等教育を受け、先生や友達との触れ合いで人間関係を学ぶ	学校で「規律」や「競争に勝つ」ことを教えられる。先生や友だちとの触れ合いから人間関係を学ぶ。実体験の中でよかったこと／よくなかったことを学ぶ。	学校での規律や勉強が、従順さを要求し、主体性(「自由」)を抑える面がある。 また、「競争」が学童期の人格形成(「愛」「倫理」)を損なう面がある。教育のあり方に再考が必要である。
	(2b) 少年期前期	中学校において多面的な教科を学習し、自意識が成長する。	勉強・運動・人間関係などで、多くの経験をし、自意識の成長と共に、悩みも増え、親の庇護への反発(反抗期)などが現れる。	親の指導や庇護から、自立していく(「自由」)ことが必要である。親離れと子離れの両方。
	(2c) 少年期後期	高校において、勉強(受験勉強)やクラブ活動、交友関係などで、成功や挫折を知る多感な時期。	気持ちの高揚・達成感や挫折・劣等感・抑鬱などを感じる。非行やいじめが現れる／遭うことも。社会を知っていく、理想主義と現実とのギャップが社会にも自分にもあることに気づく。	自分の現実に対する挫折などから、非行・いじめが現れ、周りの多くの人を巻き込む。 多感な時期において、現実を知りつつ、「自由・愛・倫理」の健全なバランスを育てることが大事である。

時期区分		全般	「自由・愛・倫理」の 状況・特徴	「自由・愛・倫理」の 留意点 
(3) 青年期	(3a) 青年期 初期	大学・専門学校などに進路が分岐する。大学は「自由・愛・倫理」について深く学ぶ場。	人生の進路が大きく分かれ始める。主体的に進路を選ぶが、意に沿わない結果になった場合も多々ある。大学はあるべき姿の「自由・愛・倫理」を深く学ぶ場。専門分野も学ぶ。	社会と歴史、そして自分の内面をも省みて、「自由・愛・倫理」の現実と理想を深く学ぶ機会。その人の人間形成の土台をきちんと作る時期。
	(3b) 20歳代	社会人としての生活の開始。下積みで力をつけるべき時期。	仕事に情熱を持ち、実践を通じて必要な知識を身につける。新しい考え・提案をしても受け入れられないことが多い。従順・協調が求められることが多い。結婚し家庭を持つことを目指す。	新鮮な情熱のある時期だが、労働条件が悪く、上司に従わされ、「自由」が制約されることも多い。この時期に「自由」を伸ばさせる職場環境のあり方を明確にするとよい。
	(3c) 30歳代	社会人として、新しい観点・精神を生かして仕事をするべき時	仕事の場で、実力をつけてきて、新しい提案をしたり、同僚と協調して仕事をしたりできる。結婚し、子どもが生まれ、家庭生活を築いていく。一方、生活が極めて苦しく、望むような仕事や家庭が持てないこともある。	現実の生活の中で自分なりの「自由・愛・倫理」の実体(「人格」)が形成されていく。いかに望ましいもの、理想を意識したものにしていけるかが大事。

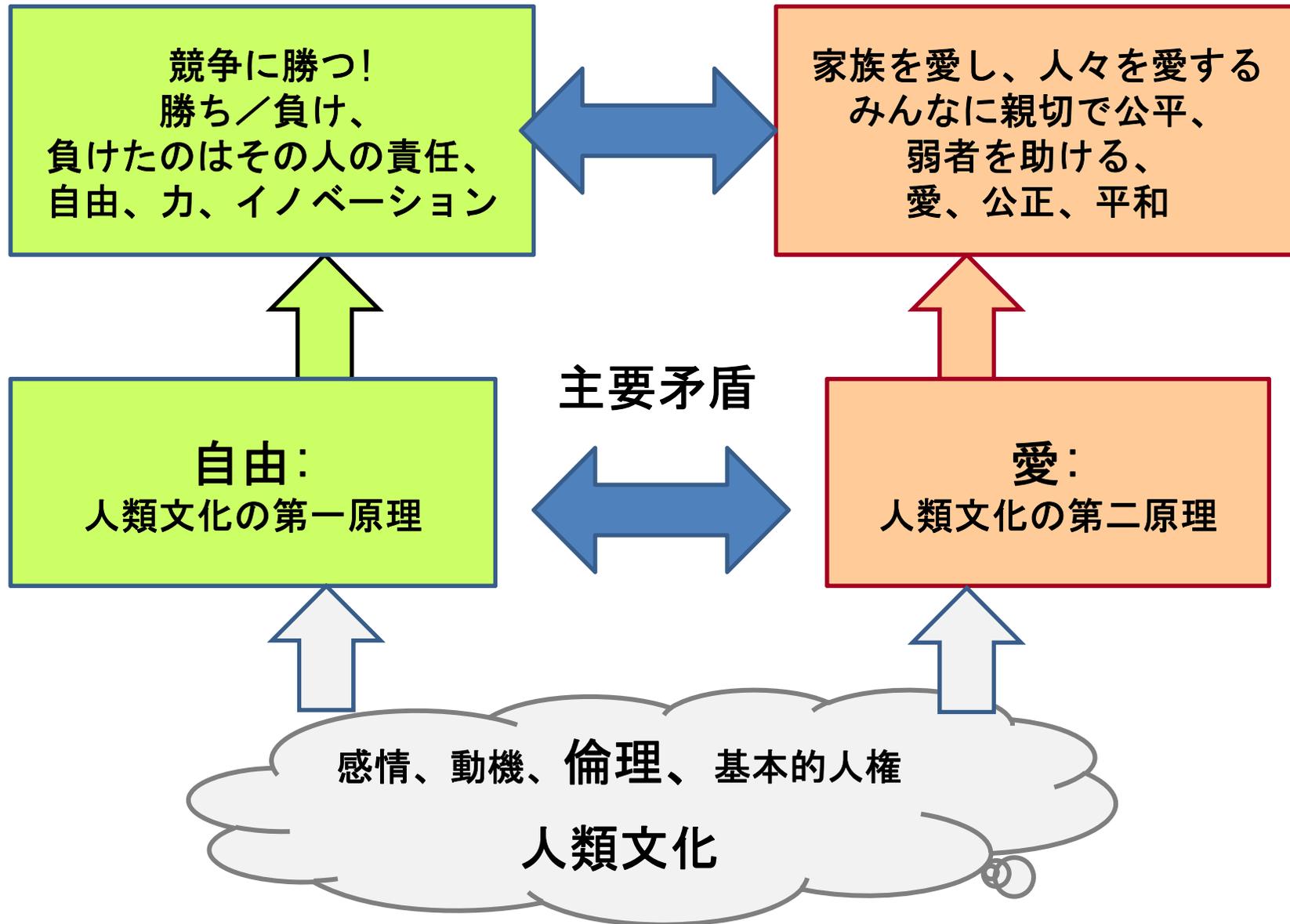


時期区分		全般	「自由・愛・倫理」の 状況・特徴	「自由・愛・倫理」の 留意点
(4) 壮年期	(4a) 40 歳代	職場をリードして仕事をする。 理想主義と現実主義との葛藤の中にある。	仕事の場で、自分の判断で、関係者の意見を調整しつつ決定し行動することが求められる。仕事が発達するとともに責任が重くなる。家庭では子育てなど「愛」の場の形成が求められる。	上司からの制約や、成果に対するリスクなどから、判断に苦しむことがある。 理想主義と現実主義との葛藤の中にある。
	(4b) 50 歳代 ～ 65 歳	社会に関わり、現実の場で責任ある仕事をする。	仕事と社会全般に対する知識・経験を持ち、関係する人々や社会との調整を取りつつ、自分で判断し実行していく責任を持つ。家庭では、子どもたちが自立していく一方、老親の介護などが必要になる。	「自由・愛・倫理」のバランスを持って(仕事や社会の)現実を改革していくことが求められるが、理想主義から現実主義に移行していることも多い。

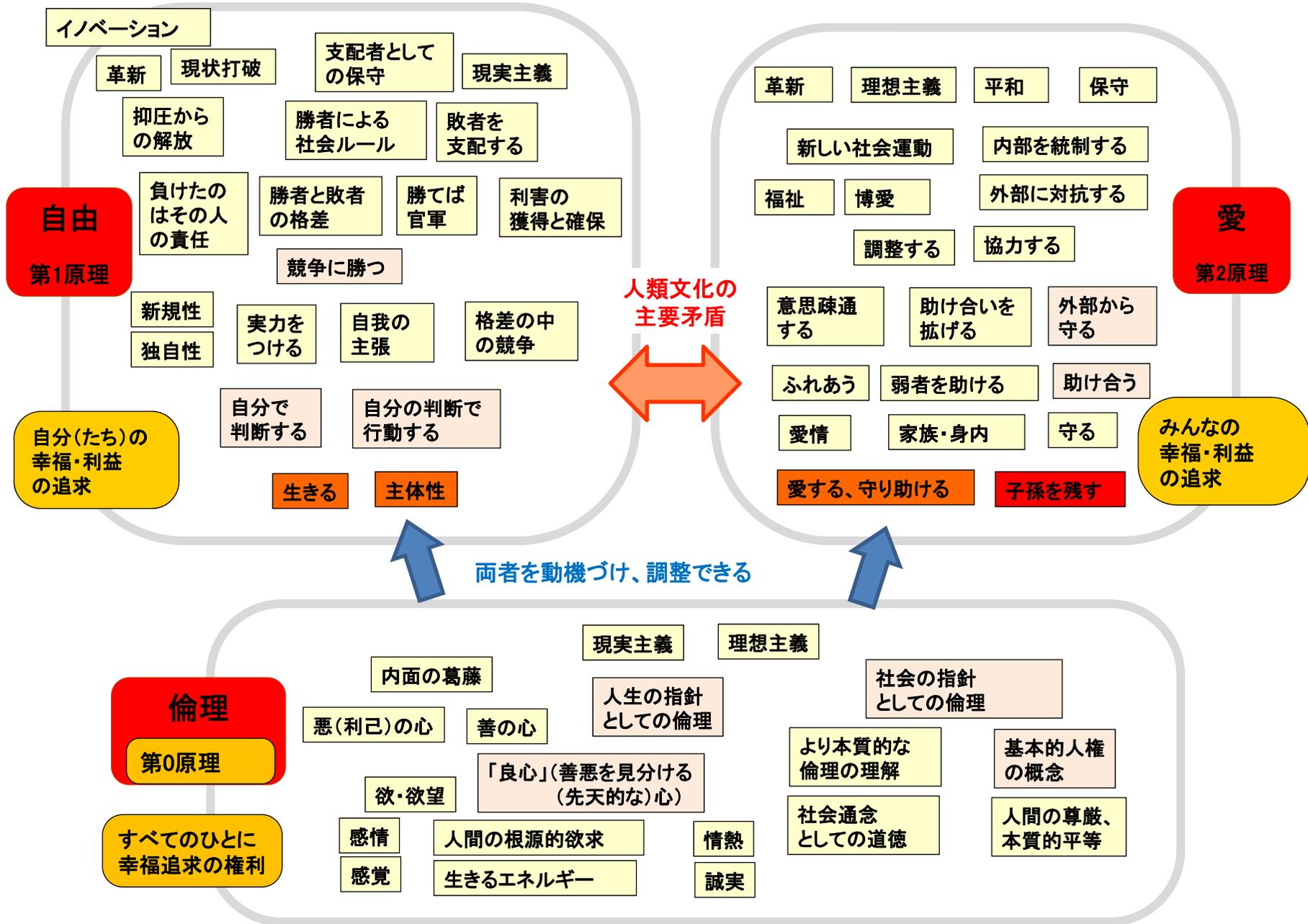
時期区分		全般	「自由・愛・倫理」の 状況・特徴	「自由・愛・倫理」の 留意点
(5) 老年期	(5a) 65歳 ～ 75歳	仕事から順次退職し、身近な所での活動に移行する。	退職していくが、地域社会や後進に貢献するような活動が望まれる。 健康面、体力面ではまだ健全であるが、気力面が先に衰えることがある。	「欲」が少なくなり性格が丸くなる面と、生活が苦しかったり孤独を感じたりして、意固地になる面がある。
	(5b) 76歳 ～	高齢期における衰えの中で、平穏な生活に入る。 闘病、介護の生活が長く続くこともある。	75歳くらいから、老化の影響が全般に顕われ、85歳以後では認知症が多くの人に現れる。 趣味など悠悠自適が一つの目標、介護を受ける生活ではできることが自ずから限られる。 ボランティアでの活動や孫たちとの交わりが楽しみ。	自分の身の回りでの「自由・愛・倫理」のバランスになる。 孤独を感じる機会も増える。 やがて死期を感じ、それを受け入れるようになる。

「自由」vs「愛」: 人類文化の主要矛盾

2016.10.25 中川 徹



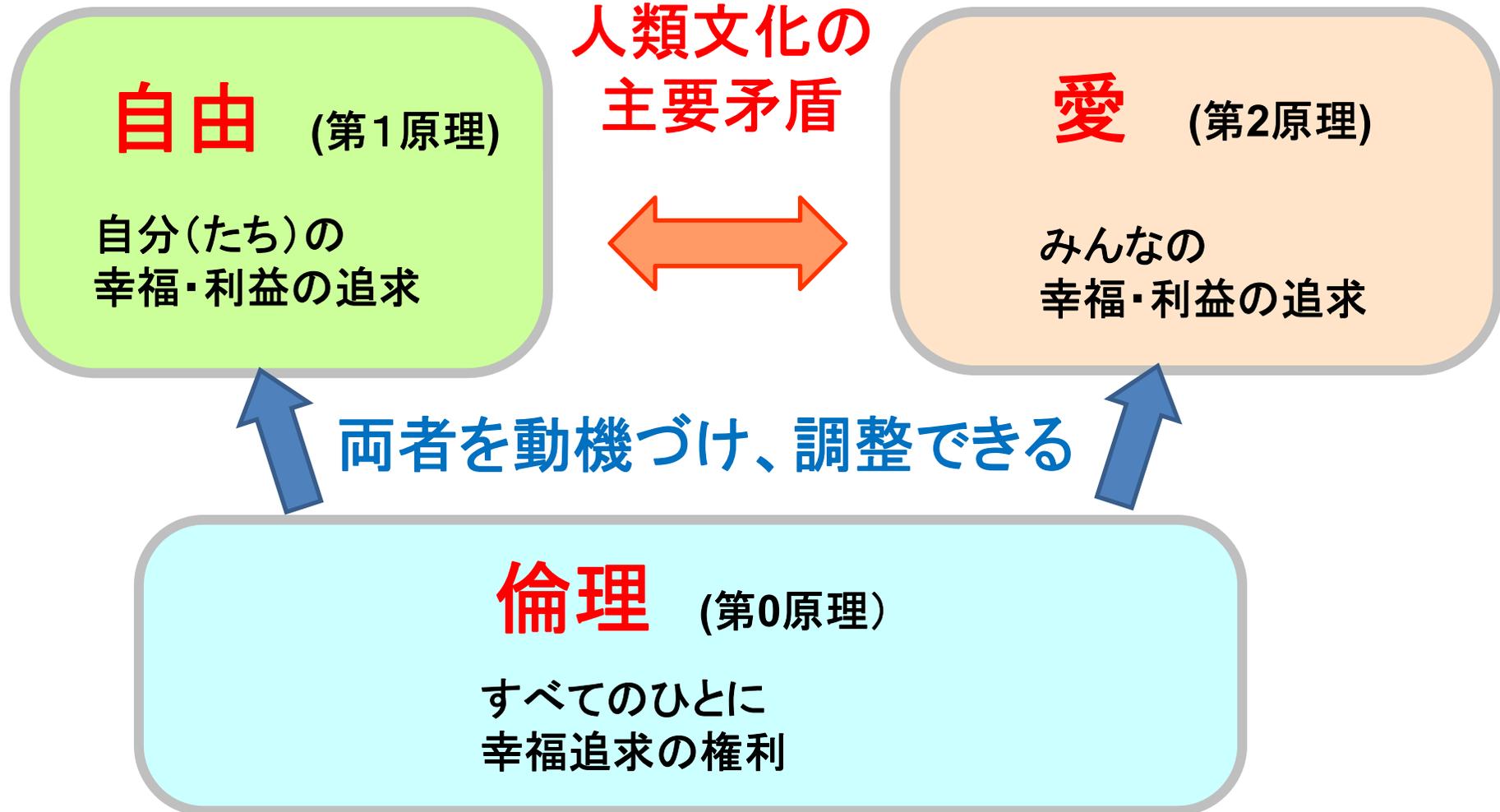
人類文化の主要矛盾：「自由・愛・倫理」の構造 (個人(間)のレベルを中心に)



人類文化の主要矛盾:

「自由・愛・倫理」の構造

(個人(間)のレベルを中心に)



「自由vs愛」の矛盾・葛藤と「倫理」 —— 基本仮説とその考察

1. 人類文化の第0原理：「倫理」

1.1 「倫理」：人の内面の根底にあり、善悪の考えと、人生・社会の指針を示す。

人の内面の根底は、感覚と感情をベースにし、「欲・欲望」を含む。
それは「善の心」の基でもあるが、「悪の心」にもつながる。
何が「善」で、何が「悪」であるかを示すのが、「倫理」である。

1.2 「倫理」は後天的(歴史と社会に依存)とだが、「良心」は先天的である。

「倫理」の中身(何が「善」で何が「悪」か)は、時代と社会で異なる。
「倫理」は社会が作り教えたもの。人類文化の歴史と共に発展してきている。

「良心」= 「内心において善悪を見分ける心の能力」 が人類共通で先天的。
(通常は、「内心にある「善の心」」の意味に使うが、本研究で定義しなおす。)
(参考：赤ん坊はどこで育てられても、言語(母語)を話せるようになる。)

1.3 「倫理」は人類文化の土台であり、「人類文化の第0原理」と名付ける。

人類文化は「倫理」を土台にして、「自由」の伸展と、「愛」の拡張を目指してきた。「自由」と「愛」の中のさまざまな対立・矛盾を調整する拠り所は、「倫理」である。

1.4 「倫理」の中核概念は「基本的人権」である。

旧来使われてきた「道徳」という語には、旧来の身分関係・上下関係を前提とした社会ルールへの「従順」のニュアンスが強い。

しかし、人類文化の歴史の中で「(人間の本質的な)平等」という概念が得られた。それを中心にした「基本的人権」が、現代の人類文化の「倫理」の中核概念である。

1.5 第0原理「倫理」の本質 = 「すべての人に幸福追求の権利がある」

2. 人類文化の第1原理: 「自由」

人類の文化は、「自由」を第1原理とし、その伸長を主要目標とする。

2.1 「自由」 = 「自分で判断し、自分で行動して、生きる」こと

自分で「主体的に」ベストと思う判断をし、行動する。その責任は自分で負う。どの行動にもさまざまな影響やリスクがあるから、成功することも失敗することもある。それを承知で、よく考えて(判断し)行動することが、個人の生きる可能性を最大化し、人類文化を新たに発展させていく。

2.2 「自由」同士が対立: 必然的に「競争」が起き、「競争に勝つ」努力をする

各人の「自我の主張」(「自由」)は、「欲しいもの」が有限だから、必然的に対立する。「競争」が現れる。「自由」は、「競争に勝つ」ことを目指す。知力・経験・体力・資源などを予め準備し、適切に判断・行動しなければならない。「勝者」は自分が欲していたものを獲得し、「敗者」はそれが得られない(最悪の場合には自分の生命をも失う)。「競争」により「強い者(実力を持つ者)」を勝ち残らせることは、生物界の大原則。

2.3 「競争社会」では「格差」が拡大していく

「競争に勝つ」ことが目標になると、「競争」はどんどん熾烈になる。

(例：受験競争、商品の価格破壊競争。人間の金銭欲には際限がない。)

「競争」が激しくなると、「弱肉強食」のぎすぎすした社会になる。

(競争を繰り返すと)勝者と敗者の立場の差が「格差」として拡大していく。

2.4 「社会的勝者」による「支配」：新しい「社会ルール」とその「保守」

(いくつもの)競争に勝った「社会的勝者」は、「社会的敗者」を「支配する」。

「勝者」が自分たちに都合がよいように、「社会ルール」を作る。(「勝てば官軍」)

(個人レベルでの例：子供の中でのガキ大将、少年期に顕著ないじめ、など)

「勝者」は、自分の体制の温存・現状維持を望む。(「保守」、「現実主義」の立場)

2.5 支配された状況からの「解放」と「革新」の運動

一方、「社会的敗者」は、支配・抑圧された状況から「解放」されることを望む。

現状の打破、現在の社会ルールの「改革」が、「自由」が目指す目標になる。

「革新」、「理想主義」の立場である。「革新」が歴史の発展を特徴づけてきた。

2.6 人類文化における「革新」:「自由」の意義

科学技術や芸術などでも、「自分で判断し、行動する」ことが、文化的な発展を生む。独自性、新規性のある科学認識や技術や芸術、「イノベーション」を生む。「自由」が人類文化を発展させるための重要な原理であると認められる。

2.7 第1原理「自由」の本質 = 「自分(たち)の幸福・利益を追求する」

3. 人類文化の第2原理:「愛」

人類の文化は、「愛」を第2原理とし、その普遍化を主要目標とする。

3.1 「愛」＝「各人がその子を愛し、家族を愛し、隣人を愛して、助け、守る」こと

その原形は、母の子に対する「愛情」。

生き物としてのヒトがその子孫を残すために、子を守り育てる本能的行為。

「愛」を、家族・隣人に及ぼし、さらに広くすべての人に向けることが、普遍化の目標。

3.2 「愛」は、「助け合う」、「与える」、「協力する」。

「愛」は、弱い者、困っている者に対して、助ける。

さらに相互に助け合う、広く助け合うことが「愛」の本来の目標である。

そのために、人に触れ合い、コミュニケーションをし、お互いを理解して、「協力する」。

3.3 「愛」は「調和」を求め、一部の「自由」を抑制して、調整する。

「愛」は、人々の「調和」を求めるが、人々の「自由」の主張の違いが大きいと困難に。自己主張する人を「なだめ」て、グループ内に留まらせるのが一法。一人の主張を認めて、他のメンバーに理解を求める（「なだめる」）のが別法。「愛」の「調和」志向が、グループメンバーの「自由」の間に「妥協」を作ろうとする。

3.4 「愛」は、多様性（多様な「自由」）を尊重した「協調」を見出す。

グループの各メンバーが互いの主張や利害の違いを認めただうえで、相互に相手を尊重し、グループとして「協調」、「相互協力」する。互いの違いが相互の弱点を補い、よりよくしていくことを認識すると、実現できる。また、一部の自己主張（「自由」）が新しく有益な場合には、その部分を従来グループから「独立」させ、（緩い）連携を持つことも有益。

3.5 「博愛」：弱者の救済、「格差」の是正による、社会「革新」の運動

すべての人に「愛」を及ぼすこと（「愛の普遍化」、「博愛」）は、「愛」の本来の目標。社会の「格差」の中で恵まれない人々（「弱者」）に、「助け」を及ぼそうとする。現実社会をそのように変えていこうとするのは、「革新」と「理想主義」の立場である。その視野が国際的・世界的になるとき、「平和主義」につながる。

3.6 「愛」は「身内」を守るために、「外部に対抗する」性質がある。

守るべきメンバー（「身内」）を明確にし、外部に対して「壁」を作り、「対抗」する。結束するために、「身内」の意見や行動を統制する（「自由」の束縛）ことがある。「保守」、「現実主義」の立場である。

3.7 「身内」を守ろうとする「愛」は、一つ上の社会レベルで「対立」を作り出す。

（例：一つの国民の「愛国心」と隣国の国民の「愛国心」とが戦争を引き起こす。）

3.8 第2原理「愛」の本質 = 「みんなの幸福・利益」を追及する

「みんな」として認識されている人々の範囲(広い意味での「身内」)が問題。

4. 「自由」と「愛」の対立・矛盾

「自分(たち)の幸福・利益」(「自由」と「みんなの幸福・利益」(「愛」との対立・矛盾。

4.1 ある人の独自の判断と行動(「自由」)を、別の人「愛」が止めようとする。

周りの(特に保護的・指導的立場の)人が、「危うい、誤っている」と考える場合。
「あえてリスクを取り、行動することが、将来の成功の糧だ」という主張(「自由」と、
「失敗は目に見えている、ダメージが大きいためやめよ」という助言(「愛」)の対立。
どちらが適切かは、場合によって異なる。

4.2 「助け合い」「協力」を求める「愛」に、「自由」が協力を拒否する。

「みんなの幸福・利益」のために「助け合い」や「協力」を求める「愛」に対して、
メンバーが「自分の利害に合わない」として拒否する(「自由」)場合。
「自由」は「自分の幸福・利益」を最大限に求めるから、この対立はしばしば起こる。

4.3 「勝負」「戦い」での決着(「自由」)を、「愛」は「平和的に」避けようとする。

「自由」同士が「競争」「戦い」によって「勝ち負け」をつけようとするのに対して、「愛」が、「勝負」「戦い」を避けて、「調整」「協調」「平和」の実現を望む場合。「愛」が「調停者」として双方から信頼され、「調停案」が双方を納得させる必要。

4.4 「社会的勝者が作る「社会ルール」に、「愛」が異議を申し立てる場合

「社会的勝者」の「社会ルール」や支配体制(「自由」)が、「みんなの幸福・利益」「博愛」に反するとして、「愛」が反対する場合。「愛」の反対の意思表示は、新しい社会運動になることがある。

4.5 「抑圧からの解放」の運動(「自由」)に、「愛」が反対する場合

「社会的敗者」が「抑圧からの解放」を掲げて、「革新」の運動を起こす(「自由」)とき、「愛」が、その趣旨には同調しても、その運動の目標や手段が「みんなの幸福・利益」「博愛」に反するとして反対を表明する場合。

4.6 「愛」が「身内」の団結を求めて、メンバーの「自由」を束縛する場合

「外部」からの脅威や攻撃に対抗するために、「愛」がその「身内」の団結を求め、メンバーの「考え」や「行動」を統一・制約しようとする（「自由」を束縛する）場合。

4.7 「愛」の「身内意識」が、外部の人の考え・行動（「自由」）を排除する場合

「愛」の「身内意識」が強く、偏狭である場合には、「身内」以外の人をはじき出され、「外部の人」の「考え」や「行動」（「自由」）が認められず、対立が起こる。

5. 「自由」と「愛」に対する「倫理」の役割

「倫理」は、「自由」と「愛」の両方を「動機づけ」、「自由vs愛」の主要矛盾を「調整」する。

5.1 「倫理」自身の理解が、人類文化の歴史の中で発展してきている。

「何が悪で、何が善か」を示し、「悪から善に向かわせる指針」が「倫理」である。
「倫理」の中身は、時代と社会で異なり、人類文化の歴史と共に発展してきている。
各個人は「倫理」を後天的に学ぶ(社会から教えられる)。

5.2 個人の心の中で「倫理」が適切に理解され、実践されることが重要。

個人の心の中で「倫理」が適切に理解され、実践されていることが、
「自由」と「愛」が本来の姿で (各個人と社会により) 実践されていくために重要である。
「自由」の中、「愛」の中、「自由」と「愛」の間にある対立・矛盾を緩和・解決する鍵である。

5.3 不十分な「倫理」(の理解)は、「自由」の精神・実践を損なう。

「主体性」を損なう <== 消極的、無気力、他人依存、無責任、付和雷同、など、

「独自性、新規性」を損なう <== 先例踏襲、ありきたり、二番煎じ、模倣、など

「挑戦的」を損なう <== 無難、萎縮、責任回避、など。

「競争」が不適切に <== 裏口入学、ドーピング、判定操作、ルール違反、買収、収賄。

「自分の利害の獲得」を不正に <== 脅迫、買収、文書偽造、詐欺、強盗、殺人、など。

「新しい社会ルール」作りを不適切に <== 奴隷制、身分制度、制限選挙、植民地制。

「現状打破」の運動を不適切に <== テロ、武装蜂起、弾圧、言論統制、など。

5.4 「自由」の土台となる「倫理」: 「基本的人権」と「本質的平等」の概念

「自由」が尊重されるためには、その「考え」や「行動」が、「倫理」に沿っていること、人間の「悪の心」ではなく、「善の心」から出たものであることが望まれる。実際的な指針は、「自由」の主張と競争の場に、「基本的人権」の順守を掲げること。すべての人々の「基本的人権」を守ることを「自由」の主張とその追求の大前提にする。

旧来の「道徳」が持つ、「服従・従順」を第一とする「倫理」観を脱して、「人としての本質的な平等」を大前提とする「倫理」観に進むことである。「画一的平等」ではなく、「人間の本質的平等」の概念と実践法の理解が必要。

5.5 不十分な「倫理」(の理解)は、「愛」の精神・実践を損なう。

「愛情」を損なう <== 無関心、嫌悪、冷酷、虐待、など、

「助ける」を損なう <== 無視する、放置する、など、

「守る」を損なう <== 放置する、見て見ぬふりをする、など。

「調整」を損なう <== 非協力、無理解、冷淡、利己的、固執、拒否、など

5.6 「愛」の土台となる「倫理」： 心の中の「愛」と「広い心」

「愛」は、すべての人が持っている「心の優しさ」（「倫理」の一側面）を基礎とする。それによって、人々と助け合う、協力する、調整することができる。また、利己的な「自由」の主張を避け、「自由」と「愛」の対立要因を減らすことができる。

「愛」は、その対象を広げ、普遍化することを目指す。その障害になるのは、「愛」自身のもつ「身内」意識（対象者を限定する意識）である。「人間としての本質的平等」の「倫理」を持ち、人々とのコミュニケーションに努め、社会・世界の状況を理解することが大事である。

5.7 経済的「格差」の問題と「富の再配分」の問題の認識

もう一つ注意すべきは、人間の欲望、特に金銭欲に際限がないことである。現代世界では、金銭が「社会的勝者」を決める最大の要素である。「富める者」こそ「社会的勝者」であり、彼らに都合がよい社会制度になっている。それが資本主義経済であり、それを中核とした資本主義社会である。これが日本でも世界でも大きな「格差」を生み、沢山の問題を引き起こしている。この点を変革して、「富の再配分」を組み込んだ社会制度にするべきである。これは「自由」のあり方の問題であり、「愛」の、「倫理」の問題でもある。

6. 考察

中川 TRIZシンポ 2016

(6) 「人類文化の主要矛盾」の解決を困難にしている理由:

(a) 最も基本の個人(間) のレベルで、
「自由」、「愛」、「倫理」のありかたが明確でない。

人間性における「欲」「悪」の問題も。人々が、知性よりも感情で動かされる。
人々が出生以来のさまざまな体験で考えが形成・制約される。

(b) 種々の社会組織における「自由」、「愛」、「倫理」のありかたが明確でない。
グループ、組織(企業、政党など)、地域共同体、国 など。
これらのありかた(社会的「倫理」)の理解が世界的に共有されない。

(c) 個人や組織が自己の利害(「自由」)を主張して、(社会的)「倫理」に
反する行動をとり、それが社会的な「勝者」になることがある。

社会的「勝者」が、自分に都合がよい社会システムを構築する。

(d) (c)の状況が、小さいものから大きなものまで至る所にあり、かつ、
歴史的な積み重ねをもっている。

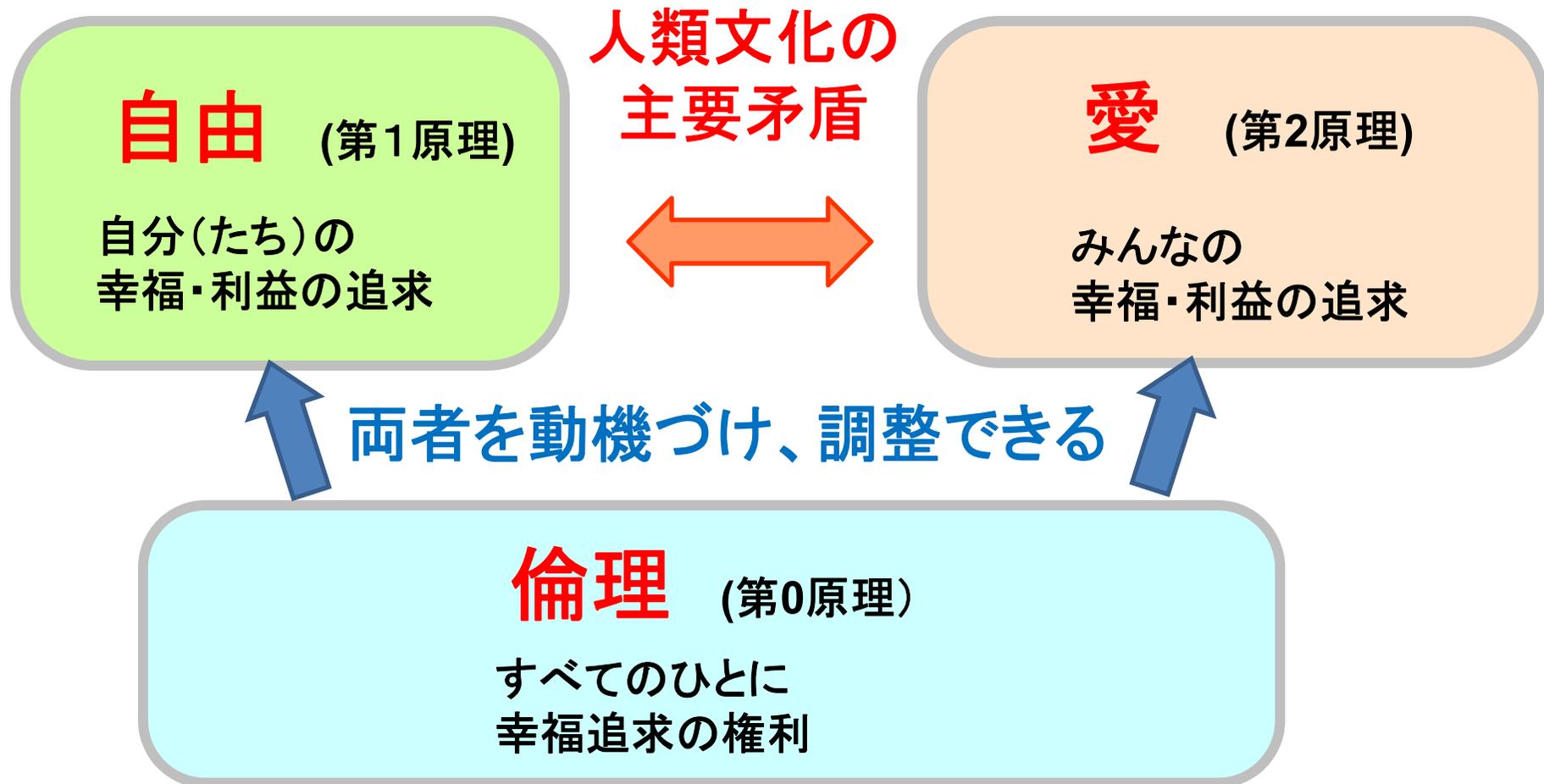
(いつの時代でも) 社会システムが(社会的)「倫理」に合わない面がある。
いままで虐げられていた人々が(c)の行動をとり、対立・闘争が起こる。

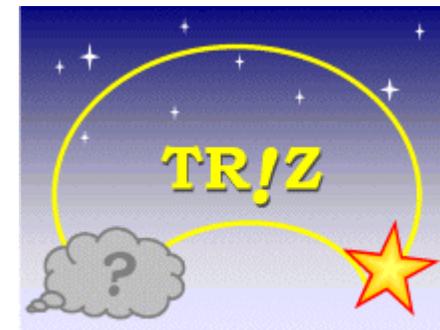
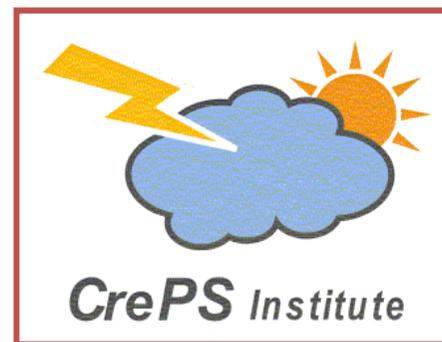
(7) 今後検討すべきこと:

上記の (a) => (b) => (c) => (d) の順に考察を進める。特に(a) 個人(間)のレベル。

7. まとめ

創造的問題解決の方法論TRIZ/CrePSを社会問題に適用した結果、
人類文化の主要矛盾を見出した。





ご清聴 ありがとうございます

中川 徹 (大阪学院大学 名誉教授)
nakagawa@ogu.ac.jp

『TRIZホームページ』(和文・英文) 編集者
<http://www.osaka-gu.ac.jp/php/nakagawa/TRIZ/>

クレプス研究所 代表 『TRIZ 実践と効用』シリーズ 出版